

労 苦 体 験 記

京都府 矢野 美三雄

任地まで

昭和十七（一九四二）年一月初旬、私は勤務した海軍工廠会計部の主計少佐より軍属として南方従軍を勧められた。

当時私は、物品会計専門で材料課に属していた。同僚も材料課の一人、他に計算課の工事番の係一人、もう一人は給与課調査場（工員の給料計算係）一人、計四人であった。

田舎者で世間知らずの母は、私の従軍を聞き悲しさの余り床についた。それでも父は男だ。三人の男子の中一人位は時勢に即応して御国のためになってもらいたいと、軍国の父らしいことを縁付いた姉にもらしたことを後日聞いた。

二月十一日、紀元節の佳き日、会計部長主計大佐の案内で工廠長の少将閣下にお別れの挨拶に参

上した。閣下よりは「今次大戦も緒戦で大勝とはいえ、前途は樂觀できぬ。諸君は当廠としてはまず軍属従軍の先輩である。工廠の名誉のため本分を尽くせ」との訓示を頂いた。途中、山陰線夜行に便乗し、戦友のT君の親戚のある京都へ寄りご馳走になった。

十二日、呉海軍の海光会（判任官雇員の宿泊施設）に入り約二週間滞在した。海軍に奉職しても舞鶴しか知らぬ私は、呉軍港の大きさと、軍都として街の広いのにびっくりした。工廠も構内が広く、工員は汽車通勤であった。私は経理部に配属で、古風な煉瓦造りの庁舎へ一応顔を出し、軍需部内に設置された第百二海軍経理部設立事務所へ出頭した。

この「百二経」は本部スラバヤ、支部はバリックパンとマカッサルで、希望により人員が配分されていた。これが私の運命の明暗を分かち私はバリックパン、同僚二人はスラバヤ、一人はマカッサルになった。

後日聞いたのであるが、同僚一人は昭和十八年頃、内地帰還して海軍書記に任官し、南方経理部へ行く途中「鎌倉丸」で沈没された。同君は妻帯者で遺児もあり気の毒であった。

出帆の二十五日までの間、休暇が出された。歓呼の声で故郷を出て休暇で家へ帰るのはどうかと思つた私は、中学の修学旅行で行かなかつた九州回遊をしようと思つた。旅行は一人旅で、あちこちの神社参りで武運長久を祈つた。熊本城や城山も見学し肥後米もたらふく食べた。

乗船は「東京丸」(六、四七トン)で乗員は経理部、軍需部、燃料廠、病院の数百人であつた。私ら最下級の雇員は兵並で、船倉の中で、高い仮設の階段で上がり下りは大変であつた。

私は海辺に育つたけれども船に乗るのは初めて、小学校の六年頃、天の橋立へ海軍の船で遠足したのと、満州旅行に敦賀から朝鮮の清津間を渡海、朝鮮より内地への関釜連絡船と数える程であつた。

翌二十六日、目覚めて甲板に立ってびっくりし

た。もう大分瀬戸内海を出たと思つていたのに、昨日と相変わらず軍港内に停泊していた。やっぱり防諜上の作戦であると。

船内での空気の悪さや、馴れぬ航海の海上生活で胸部に痛みを感じた。さあ大変だ。まだ生来大した病氣もしたことのない私、すすめられるままに海軍病院長の軍医中佐の診察を受けた。軍医中佐は、「何か腰をまげ重量物の運搬をしたことはないか」と尋ねられた。はたと思ひ当たつたのは二月二十二日頃、自分等の酒保物品のビールや缶詰を精いっぱい運んだことである。私は農家の三男坊とはいえ力仕事をしたことはない。群衆心理で仲間と使役に励んだことと分り安心した。

「東京丸」は海軍徴用船であるので、警乗員は退役の老佐を分隊長として、兵曹長が分隊長、下士官十人程で、船尾には木製の擬砲が備えられた、誠に無防備に等しい心細さであつた。

台湾沖あたりで半袖、半ズボンの防暑服に着替

え、お互いに毛むくじやらの脛を笑いあった。海中に浮き沈みするビール瓶を見て、潜水艦の潜望鏡かと大騒ぎした。燕は賢い鳥で木切れを足ではさみ広い太平洋を渡海する。私らも翼があつたらなあと話し合った。

海軍は階級意識が厳しく、准士官以上と下士官兵との区分ははっきりしていた。おえら方は船橋の風通しのよい船室で扇風機付き、私らは馬並の船底、とても暑くて眠られたものではない。私らは毛布をかかえて「男の夜たか」かと冗談をいい甲板に寝たものだ。

便乗者は何も用なしで、積み込んだビールをたらふく呑み、缶詰も満腹する程食べた。器用な友は針金を鋸代用としてビール瓶を切り、手製のコップを造って楽しんでいた。

途中三月四日、ミンダナオ島タバオへ寄ったが、上陸も序列があつて士官、高等文官が第一、下士官兵は陸を見つつ波の上で待機した。生まれて初めて見る南洋の島、紺碧の海、よくもここまで無

事に来られたと感謝の念でいっぱいであった。先着のマカッサル支部で南洋の果物の接待を受けたが、戦塵さめやらぬ市街は陸戦隊の警備が物々しい。壊れた水道管からの水で水浴し、船旅の垢を落としたのである。

聞くところによると、この地はかつてはスペイン領で、今次大戦前は米国の支配地で、弱い民族の悲哀を垣間見たが、大東亜戦争開戦と同時に原住民が蜂起し、日本居留民を虐殺したとのことである。街は街路樹がアーチ状をなし道路は涼しく、英語が通用する。

三月九日の蘭印降伏後の十二日、マカッサルへ入り、十五日より二十日までマカッサル支部に仮入部した。

ここでも士官や高等文官は水交社に泊り、私らはアンペラ毛布である。それでも軍隊並に支部長主計少佐の巡検を受け、プールで泳いだり買物をした。

三月二十五日「興安丸」に乗船、出港、途中警戒しつつマカッサル海峡を渡り、二十八日に最終地のボルネオのバリックパンに上陸、第二百二経バ支部まで根拠地隊のトラックで行く。そこで飯庁舎へ入り、看板を掲げ開庁した。

思えば前後を通じ三十二日間、長い危険な航海であった。

気のやさしい上司、S主計大尉

私がバリックパンの経理部に配属されて、まず印象に残ったのはS主計大尉である。S主計大尉は昭和十七年五月、海軍工廠の経理部付として着任され、昭和十八年十一月、「高砂丸」主計長として転任されるまでの間お仕えした方である。

私は昭和十七年五月、S主計大尉の着任時に、栈橋までお迎えのため行ったのである。S主計大尉は東京の金満家の息子として一高、東大とエリートコースを歩み、日銀に入行予定であったが、二年現役主計科士官として経理部先任部員として

活躍されたのである。色々と高い学識で私ら部下をよく指導して頂いた。

またその反面、進取的で研究心旺盛、当時としては珍しい自動車運転をし、事故に会われたこともあった。また軍律裁判の法務官代理として現地民の処刑に立ち会われ、そのショックで食欲が落ちたと聞いている。そしてスラバヤへ向かう陸軍病院船の婦長が、かつてのS主計大尉の幼稚園の頃の先生であったというので、慰問された際に私も同行したが、誠に人情深い恩を忘れぬ人格の方であった。

一年半の経理部勤務後「高砂丸」主計長を経て、昭和二十年一月二十七日、軍需省管理官として会議中、B 29の七〇機に及ぶ大空襲で爆死されたことがかえすがえすも残念である。

男の中の男一匹、向井主計大尉

昭和十九年一月十九日、女子理事生三人が初体験の空襲を受けた。向井主計大尉は囑託や女子理

事生を防空壕に退避させた後、皆が止めるのも聞かず庁舎が心配だと走って行かれた。誠に勇敢にして部下思いの方であった。

また、公私混同を嫌われた主計大尉で、燃料廠長のパジャマを経理部縫製工場で作るよう話があった際も「縫製工場は海軍の縫製工場で、私用のパジャマはできません」と断られた。自分がやっている事は正しい事であるとの余程の信念と勇気がなければ、廠長から叱られても上官の面前でいえる事ではない。自分の栄達や保身の事のみ考え、何の信念もなく、上司の命令に盲従するような人には到底できないことである。

製糧士が小指の太さのある「うどん」を作ってそれを食卓に出す前に上司から叱られた。向井大尉は「これはズドンだ」と皆を笑わせながら食べられたという一事でも性格が判る。終戦後三菱樹脂に就職され、昭和五十一年永眠された。

几帳面なF書記

私の上司であったF書記は誠に人柄は優等生で、海軍の会計監督庁としてうってつけの方であった。呉経理部出身の同氏は、呉軍港出港以来、私の上司としてすべての指導を頂いたのである。また同氏は達筆で、経理部の看板を書かれ、それは開庁より三年三カ月間、庁舎に掲げられていた。

私は工廠出身で主に物品会計の受持ちであったので金銭会計である艦隊経費の整理は誠に素人であったが、何くれとなく指導して頂き、今も感謝している。

同氏は昭和十八年五月、スラバヤ本部へ転ぜられた。戦後は税務署長として広島県で活躍されていたが、その後のことは不明である。

豪胆なる書記

S書記との出会いは、それこそ呉軍需部で経理部が設立された時からの深い交際であったが、彼は呉海軍工廠会計部材料課出身と、私とよく似た

経歴で、軍でも私より一年若く、良き先輩であり同僚でもあった。そして彼は既に支那大陸での従軍経験もあり機敏な性格であった。

パリック・パンで初体験の空襲の夜、彼は当直員であった。逸早く爆音を耳にした彼は「夜襲！夜襲」と連呼して、眠りこけていた若者達を防空壕へ退避させ、一人の犠牲者もなく事無きを得、翌朝の経理部長の朝礼訓示で絶賛を受けたことが、彼の将来の立身出世の糸口となったのである。また彼は中々人望厚く、換言すれば、人心収攬術に長じていた。

時には携行したアコーディオンを弾き、郷愁にかられる皆の心を慰めてくれた。またスポーツも達者で、戦中は敵性遊戯などといわれた野球にも名投手として登板し、海軍のお家芸のバレーでは後衛としていつも勝利を納めた。そういった彼は女子理事生にもてたのである。昭和十八年、海軍書記が増員された時、イの一番で軍刀従軍服の勇姿にかわった。

昭和二十年六月、豪軍が上陸してくるや物資輸送の主任として活躍されたが、彼の豪胆さが仇となり、苦力を連れて苦力小屋で一服中、機銃掃射で大腿部盲貫銃創、出血多量で名譽の戦死をされ、二十九歳で我々は涙と共に南洋の地に彼を葬ったのである。

初代支部長S中佐の思い出

S中佐は経理学校出身の立派な方であったが、いつも訓示は、大和民族の優秀性を強調され、インドネシアのジョンゴス（下男）が親指を二本立て「トアン、ニッポン、インドネシア、サマサマ（日本とインドネシアは同じです）」と言ったのに対して「何が同じか、日本は征服者だ」と、このように一時が万事国際的である。海軍に似合わぬ陸軍式国粹者であった。

経理部の出納官吏であったので上級者である第二十二根司令官海軍少将の金庫検査はきちっと受けられ、さすが主計科士官であると感心したもの

である。

中佐は舞鶴経理部の部員で、私の勤務庁の工廠会計部の部員と経理学校同期であったので、時々お目にかかったこともあって、支部にこられたのも何かの縁と思った。

努力家温情味のあるN主計少佐

N主計少佐は昭和十八年一月、本部より転任して来られ、同五月には本部へ帰られ、僅か四カ月の短期間であった。当時の支部長は燃料廠会計部長が本務であったので文字通り支部長代理の配置であった。

後日、戦友会で知ったのであるが、出身は水戸で一浪で進学校の中学へ入った。海軍の秀才の集まる経理学校の入試では、六百人の志願者が六十人にしぼられ、最終的に合格は十人になり、この実に六十倍の難関、十人のトップで卒業されたといわれた。

戦友会でも少しも威張るところなく、私ら下級

者にも親しく話して下さったことを思い出す。

以上の上司先輩に指導を受けつつ、我々は戦ったのである。当地も、いつまでも平和―時々空襲はあったが―は続かなかつた。

昭和二十年六月十五日、「今日の空襲はびつくりしたな、いつもと様子が違ったからな」と語り合いながら同僚数人と庁舎へ入った。ところが庁舎内では異様な空気がみなぎり、皆がY主計大尉を囲んでいる。大尉は「たった今、司令部から通報があり、第四砲台が敵艦三十数隻を沖合に見つけた。同時に『千早二号作戦』が発動された」と語った。

さらに「諸君は直ちに所定の行動に移る。まず書類を今日中に焼却する。諸君の武運を祈る」と。これは大変なことになった。私にも初めての敵上陸作戦対策だ。

海岸にある小高い防空壕に登り、双眼鏡で眺めると赤道方向に動いているのが良く見える。敵艦

が眼前に出現したのである。そのうちに、遙か東方の飛行場辺りにドカンドカンと艦砲射撃が始まった。それこそ腹にずしんと響く、生まれて初めての体験で、身の縮む思いであった。

私は防空壕を下り、昼食もそこそこ、庁舎前に横一メートル縦二メートル深さ約七〇センチの穴を全員で掘った。こうして書類焼却の準備を終えたが、それからが大変だ。炎天の赤道直下である。帳簿はばらして投げ込むが思うようには燃えない。

私は私物の内地より持参した書類も放り込んだ。私本「戦時日誌」も燃やした。必要な品物だけをリュックに詰め込み、背負った軍刀二振り（一刃は父に買って貰ったものと一本は経理部で役得で入手した陣刀の立派な物）、それに燃料廠製の穂先の短いたんぼ槍にゲートル、戦闘帽、誠に戦国の落武者である。毛布やマットも経理部のトラックに乗せ、マハカム河中流の都サマリ نداを目指した。

マハカム河はボルネオの大河で、鱒が流木のよ

うに浮かんでいて気持ちのよいものではない。

主計隊の任務の握り飯の運搬を命ぜられた。私は同僚の丁君に頼んだ。彼も嫌であったろう。彼は先年亡くなられたが、彼は寺の和尚さんで良い人であった。

爆撃をさけて樹の下では軍医が麻酔なしで手術をしている。「命が惜しいなら辛抱せい」と、そこそ地獄であった。特務士官は逃げ帰って来た兵隊に「敵前逃亡だ」という。虎の子のトラックもやられてしまった。とぼとぼ歩くだけだ。経理部長の主計大佐には足の三里に灸をせいと教えて頂いた。

大変なことには多くの戦友が疲れて倒れてしまった。気の利いたN大尉が、ブランドーを口に流し込み、さらに頭や顔を思い切り殴った。やっと気が付いたのでテント内で休ませておいた。

ボルネオではダイヤモンドが産出したので、それを潜水艦の眼をかすめて内地へ送った。それこそ大切な工具機械に使われた。猛毒を持った百足

が出てかまれたら命取りになる。

スモイという村は日本の田舎のような風景で、小川が流れ、小さな農家が点在し、空は青く澄み切り、風は心地良く吹き、鶏も鳴いていた。川を堰き止めて小魚を取って食べたが、どうやら毒を含んでいたらしく皆苦しんだ。四十八キロ地点まではあちこちに食糧が積んであった。

昭和二十年八月十八日に、やっと日本が負けたことが判った。初めは豪州軍に降伏であったので食糧も充分配られたが、後はオランダになり随分苦しめられた。

収容生活の苦しみ

昭和二十年八月、敗戦と共に私らは苦しい生活が始まった。ロアボアという所で小さな平屋に収容された。私らは幹部の室と一般に区分されて寝た。

第一の苦労は水汲み作業であった。日本人は河での水浴はどうも向かない。ドラム缶の急造風呂

で順次に入った。ある日命令が出た。ロアボアから来た日本人は全員整列せよと。何かと並んでいる。気味の悪い首実験だ。バリック・パンから来た私らは心配ないがサマリンドに居た者は気掛りだ。それでも何とかすんだ。

財産を隠すのも苦勞した。賢いK兵曹はオランダ銀貨を木の根に埋め小出しにして品物を買っていた。同僚のY君は指に包帯してダイヤモンドを隠し、オランダ兵でもここまでは探すまいと言っていた。

原住民の足の裏は随分丈夫だ。釘の山でも平気で歩いていった。

スクリーンキャンプ

サマリンドで広大な土地に無数のテント小屋が並ぶ。なにしろ六千人もの人間を収容するのだから大きなテント村が必要になる。

ここで日本人帰国者の最終検査が行われ、戦犯容疑者と規則違反者が摘発され、隣接のブラック

キャンプに移送される。

ブラックキャンプは金網の柵で仕切られた一面に設けられており、戸数は約十戸で百人程度収容できる。名はブラックであるがテントは緑色であった。

キャンプの食事

食事には参ったが、朝食も昼食も、また夕食も小さな食器に軽く一杯の米の飯と、塩味のついたマトンの挽肉の缶詰半分だけで、野菜類や汁気は一切なし。今までは菜っ葉を中心とした繊維質の食事であり腹の調子がおかしい。以前ならば食べながら話が弾んだが今はまるで禅寺の僧侶が向かいあって威儀を正し食事しているようである。

自分のテントからブラックキャンプがよく見える。人の気配はない、結構なことだ。全員が無事に帰れるらしい。帰り船は出航したのかな。サラバ、サマリンド。乗船帰国命令だ。

一週間の予定が三週間となった。スクリーンキ

ャンプともお別れだ。またボルネオともおさらばだ。帰国という大目標が目の前にあつたから過酷なテント生活でも病気になるなかつたのであろう。六千人もの荒くれ男もおとなしくいたのであろう。もしこのような虐待的状况が以前にあつたとすれば、間違いなく暴動が起つたであらう。

夜になって多数の機帆船がマハカム河に寄つて集まつて来た。一隻ずつ着岸し、帰国日本人は一列になつて棧橋に並び、先着順に乗船する。そして先頭から梯子を伝つて深い船倉へ降り、順々に詰めて行く。船倉がぎつしり詰めれば、次の者は左右の舷側に一列に座る。

最初の機帆船が満杯になれば出航する。乗船者の着席位置についてはこだわる必要はないが、穴蔵のような船倉より解放的な甲板の方が良い。これでボルネオともお別れだ。夜空には南十字星がほほえむ。さようならボルネオよ。さようならサマリンドよ。

【解説】

体験記執筆者は、これまで軍属として勤務した舞鶴工廠からボルネオまでの、いくつかの体験記を寄せられている。

今回は、その間仕えた海軍軍人・軍属上司五人の点描、及びキャンプの食事などを交えた終戦後の捕虜生活などの体験を記録されている。

執筆者は、最後にボルネオのバリック・パパンに上陸、第一〇二経バリック・パパン支部を開庁、勤務した。この地域は石油地帯で、大東亜戦争の緒戦において、南方資源確保という大使命の下に確保された油田地帯であり、南方の戦略的な拠点でもあった。

今次大戦の初期、我が国が戦争に踏み切るのに、我が国に対する石油の輸出禁止が大きな要因であったとされるが、このため大東亜戦争の初期の作戦における蘭印作戦には、大局的に敵に石油資源破壊の暇を与えないように各方面か

ら急襲的に攻略し、それを確保しなければならぬという条件があった。

具体的には、重要油田地帯のパレンバンを敵の破壊に先立って、無傷のまま占領・確保できるかどうかということにもあった。

これらの作戦を遂行するために、我が軍の最初の空挺作戦を断行することによって、極力これが目的を達成に努力することにも命題が残されていた。

緒戦のマレー、比島作戦とは別に、南方軍直轄の川口支隊は、昭和十六年十二月、北ボルネオのミリ及びセリア、クチンを占領し、四月にはボルネオ守備軍司令部を編成して、これを南方軍の戦闘序列に編入した。当時ジャワの攻略に任じた第十六軍は、先遣隊とも言われた前方基地攻略部隊を逐次繰り出して作戦を開始した。

執筆者が勤務したバリック・パパンは、第三十八師団の主力により占領された。また、海軍部

隊はこのバリックパパン及びケンダリーを基地として、各地の航空勢力と敵海軍をスラバヤ東方面等において攻撃し、ジャワ本土の周辺地域は占領、ジャワ本土攻略態勢を完了している。

パレンバン攻略は、第一挺進団主力の空挺の奇襲により油田地帯を占領し、第三十八師団主力は、上陸用舟艇により海上機動をもってテラ河等を遡航して、既に降下している挺進団と協力してパレンバンを確保している。

また、日本海軍は、ジャワ攻略部隊の上陸作戦開始に当たり、スラバヤ沖海戦、バタビヤ沖海戦等において敵に決定的打撃を与えた。これらの海戦における根拠地となったのは、バリックパパン等のジャワの要地であった。

筆者が昭和十七年に勤務したバリックパパンは、このような緒戦の成果をもった要地であった。しかし、そのバリックパパンにも、昭和十

九年ころより空襲を体験するようになる。そして敵の上陸作戦の対策が講じはじめられる。

『昭和二十年六月ころ、海岸にある小高い防空壕に登り、双眼鏡で眺めると、敵艦が眼前に出現している。そのうちに、遙か東方の飛行場辺りにドカンドカンと艦砲射撃が始まった。生まれて初めての体験で、身の縮む思いであった』と。

そして終戦となり、

『敗戦と共に私等は苦しい生活が始まった。ロアボアという所で小さな平屋に收容された。私らは幹部の室と一般に区分されて寝た。第一の苦労は水汲み作業であった』と。

このように、執筆者の身には、幾多の好悪の思い出が重なっていたであろうが、その中で、『夜空には南十字星がほほえむ。さようなら、ボルネオよ。さようなら、サマリンダよ』と、ボルネオの懐かしさを思い出すように、体

験記は結ばれている。